

遠山一行著作集

2

遠山一行著作集 2

遠山一行著作集第2巻

昭和六十一年十二月十日印刷

昭和六十一年十二月十五日発行

著者 遠山一行

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一 振替 東京四十八〇八

電話 業務部(〇三)二六六―五二一 編集部二六六―五四二一

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

定価 二〇〇〇円

© Kazuyuki Toyama 1986 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

目 次

名曲のたのしみ 9

古典について——モーツァルト 11

ショパン 16

バッハ 23

ロマン派の世界——ピアノと歌曲 34

ロマン派の作家たち 42

ドビュッシーの孤独 50

ストラヴィンスキーとバルトーク 58

シェーンベルクと十二音主義^{ドデカフォニーズム} 64

音楽のよろこび——私の名曲七十五選 71

オペラの世界 82

オペラの作家たち 90

ワグナー以後 98

百選リスト 112

百選のレコード 116

音楽とともに

173

I

会話の音楽

175

父としてのバッハ

179

バッハの《マタイ受難曲》

183

バッハの音

191

バッハのクラヴィア音楽

194

モーツァルトと自由

199

モーツァルトと成熟

206

シューベルトの狂気

209

音の発見——ショパンのピアノ協奏曲

213

II

日本人にとって西洋音楽とは何か
パリで学んだこと——他者との邂逅

218 228

古典と音楽 237

デューラーとバッハ 239

戦時中とバッハ 242

バスカルの時代と音楽 245

ベートーヴェンと後世 248

ロランとフランス劇音楽 253

ニーチェと音楽 255

ブルースと音楽 261

初期論考 265

ベレアスとメリザンド 267

ドクトル・ユーバリノス——音楽の古典性について

*

遠山一行の仕事 2 (井上太郎) 285

批評の余白に 2 295

遠山一行著作集 第2卷

名曲のたのしみ

古典について——モーツァルト

音楽史上のおびただしい作品の中から、百曲の名曲をえらび出す、というのは、一体どういうことなのだろう。

たとえば、学校で、西洋音楽史の概略を説明する為に、適当な実例として百曲をえらぶ、という場合が考えられる。これはむづかしいことであっても、不可能というわけではないだろう。歴史を見る心に、一人一人ちがいのあるのは止むを得ないが、しかし、私のえらぶ百曲が、すでに書かれた教科書や解説書の実例と、そうちがったものになるとはおもわれない。

だが、それとは別に、こういう場合も考えられる。母親が息子にレコードを買ってやるとする。彼女は、その時に、迷わずに、一枚のレコードをえらぶかもしれない。その選択にも、むろん、いろいろな理由はあるだろう。が、いず

れにしても、それは、教科書の譜例をえらぶのとは、ちがった種類の仕事なのだろう。その理由を、誰も本当には理解することはできず、ほかにもつとえらびようがあったらうに、ということとは、この場合意味がない。

数年前、あまり音楽をききなれない人々のために、ドビュッシーの作品だけによる音楽会が企画されたことがあった。私は、そこで短い話をしたが、聴衆の中の一人から、あとで手紙をもらった。私は、ベートーヴェンの音楽こそ、本当の音楽であるとおもっていた。そのほかの音楽は、どうも同じようにはうけいれることができなかった。けれども、今日、ドビュッシーをきいていて、この音楽が、不思議に、ベートーヴェンとあまりちがわないことがわかってきた。自分は、これから、もつと別の音楽もうけいれるようになるだろう。そういつた趣旨の手紙だった。

彼がドビュッシーに何をきいたのか。それはさしずめわからない。いづれにしても、それを、ベートーヴェンに似ている、といったことについて非難をしてはいけないだろうとおもう。この人が、今まで、ベートーヴェン以外の音楽をうけいれられなかった、ということとは、単なる狭量からではあるまい。彼が、すべての音楽を、ベートーヴェンの尺度で計っていたということでもないだろう。はつきりいえることは、彼が確かにベートーヴェンをもっていた、

ということである。

彼がベートーヴェンしかもっていなかった、というのは、勿論、気の毒なことといってもよい。しかしながら、よく考えて見れば、我々一人一人にとって、芸術を体験する上に、彼とちがった道があるわけではないことがわかるはずである。

私たちは何かをもつて出発するのだ。それは、あるいは、芸術的な感動というようなものではないかもしれない。サン・テグジュペリが、『星の王子さま』でかいた、あの小さな花のようなものであったら素晴らしいだろう。しかし、それは、私たちには少しぜいたくなことにもおもえる。私たちのもっているものは、もつとちがった、できることならばすててしまいたいようなものであるかもしれない。むしろそういうものであることが多いのだろう。それにしても、私たちは、それをもっているのであり、私たちが、何かを美しいと感じ、みにくいと感ずるとしても、どうやら、いつでもそうした地点から出発しているようである。

そして、ある人々にとって、それが何かの芸術上の体験に結晶する。何か、かけがえのない作品の存在が意識される。彼の前に、一つの古典が生れるのである。

古典というものが、そんなに個人的なものであるはずはない、といわれるかもしれない。一人一人の体験から、古

典という普遍的なものが残る、ということについて、私に何か確固とした理論があるわけではない。いずれにしても確かなことは、誰でもが、こうした古典の体験をもっているにちがいないということであり、そうでなければ、それは、もう、芸術上の体験とは呼ばれ得ないものなのだ、ということである。

「名曲百選」という仕事をはじめに当って、私には、何もはつきりした成算はない。別に人とちがったやり方をしたり、変った曲をえらんで見たいとはおもっていないが、それかといって、現在の私の気持が、教科書の譜例をえらぶ、というような仕事からいささか遠いということは、正直にいつておかなければならない。「名曲百選」とは、結局、私自身の古典の体験を語ることなのだろうが、それが通常の名曲解説とはちがったものになるとしても、ゆるしいただかなければならない。

私が最初にえらぶのは、モーツァルト（ヴォルフガング・アマデウス、一七五六一一七九一）である。古典という言葉を考える時に、私の胸にうかぶのは、何よりもまずモーツァルトの音楽なのである。

もつとも、それは、決して私だけのことではないだろう。多くの人々の心の中で、彼の音楽が、どのように大きな意

味をもっているか、ということをも、私も知っている。これはまた、音楽の歴史家たち、美学者たちにとっても同じことであろう。

しかしながら、モーツァルトが、私にとって、一つのかげがえのないものになってきたのは、必ずしも、彼等の確信、彼等の理論と歩調をあわせた、というわけではない。むしろ、それは、ゆっくりと——ゆっくりすぎるくらいに——私に向ってやって来た。いや、現在でも、モーツァルトとは何か、と誰かにたずねられたとしたならば、やはり、私にはうまく答えられそうにないのである。

だが、それは、ことによつたらいつになつても答えられないのかもしれない。モーツァルトの音楽の古典性ということについては、私自身説明の言葉を沢山もっているし、彼の天才に関する多くの人の分析を、私はそのままうけいれるのであるが、モーツァルトは、私にとつて、いつでも、それ以上のものである。正直な言い方をするならば、その音楽の中に、私は人間の心のあらゆる秘密をきくのである。近代音楽は、その後、なるほど、モーツァルトの知らなかつた多くの魅力を加えたかもしれないが、音楽の中にあつた多くの人の姿は、モーツァルトにおいて、一番深く、そして豊かなものであつたと信じている。古典とは、私にとつて、結局そういうものでなければならぬのである。

モーツァルトに関して、これ以上、何がいえるだろう。その音楽については、あまりに多くのことが語られすぎた。我々の間でも、小林秀雄氏の名著があらわれて以来、さまざまなモーツァルト伝説が生れている。人々は一人の「無意識の天才」について書き、音の世界にだけ生きた、神秘的な音楽家を空想した。

そういう空想は楽しいだろう。しかし、モーツァルトの純粹さということをお口にすると時に、むしろ、人は、不純な文学的空想を楽しんでいるのではないか。私は、そのような純粹さを信じない。もし、芸術で、純粹さというものが問題になるならば、それは、太陽の光が、すべての色を含みながら、透明の白光に輝くような、そうした純粹さだけである。モーツァルトの音楽には、そういう純粹さに達する多くの瞬間がある。

だが、これ以上、モーツァルトについて語ることは、現在の仕事の目的からはずれてしまう。百曲のはじまりとして、彼の作品から、いくつかをえらばなければならないのだが、これは、全くむづかしい。モーツァルトにも増して多くの作品をかき、しかも、ほとんど駄作というものを残さなかつたバッハの場合でも、もう少したやすくえらぶことができそうにおもう。モーツァルトについては、正直なところ、そういう仕事は私には、ほとんど意味がない。

モーツァルトの音楽は、なにげなしに、私の期待のそとからきこえてくる時にすばらしい。それも、むしろ私の知らない曲であればよい。たとえ知っている曲であっても、全くはじめて出会うようにきこえることが望ましい。「モーツァルトの音楽を思ひ出すといふ様な事は出来ない」と、小林氏もかいているが、彼の作品から、何をえらぶか、と頭をなやますのは、どうも、出来ないことを、出来るとおもい込んでいるような、むなししい気持になるのである。

はじめに、嬉遊曲の中から一つえらぼう。嬉遊曲やセレナードのような、気楽な作品の中に、果して彼の傑作が求められるかどうか。当然異論はあるだろう。しかし、こうした音楽がもつ、窓をあけはなったような自在な形式性の中に、モーツァルトの天才が自由にはばたく場所があることは間違いない。それよりも、歴史を超えた彼の音楽が、ひそかにバロック音楽の日常性の楽しさと手をにぎる姿を、私は、嬉遊曲の、さりげない、早い筆致の中に見るのである。それは、「ジュピター・シンフォニー」の終楽章や、ミサ曲のフーガの多声性よりも、もっと確かに、モーツァルトと歴史とのかかわり合いを語っているようにおもわれる。

そういう意味で、一番適当かどうかはわからないが、ここでは、有名なメヌエットの入っている「嬉遊曲」(二長

調、K・三三四)をえらぶことにする。私の選択が(あとで述べるように)、モーツァルトの晩年の作品にかたよることを予想して、比較的若いころの音楽を一つ入れておきたいという気持もある。

次には、いま名前が出たついでに「ジュピター・シンフォニー」(ハ長調、K・五五一)を、早速リストに加えておく。これは、彼の交響曲のうち四一番と数えられるもので、同じ一七八八年にかかれた三九番(変ホ長調、K・五四三)、四〇番(ト短調、K・五五〇)と共に、三大交響曲といわれている。ほかの二曲も、できることならとっておきたい。ことに三曲とも非常にちがった楽想をもっている。で、どれもおとしたくないのである。しかし、そういいたせば、百曲を全部モーツァルトでうずめなければならなくなってしまう。交響曲の代表として、最後の一曲をとるのだと考えていただいても差支えない。

ただ、四〇番がおちたのは、いかにも残念だから、そのかわりに、同じト短調の、有名な「弦楽五重奏曲」(K・五一六)をとることにする。モーツァルトの作品に、短調の曲が極めて少ないことは、よく知られているが、しかも、その短調のものに傑作が多く見出されるのは、おそらく偶然ではない。例えば、ハ短調では、ピアノ協奏曲のK・四九一、ミサ曲のK・四二九などがあり、いずれも、私の大